



敦

とんこう

煌

井上靖

新潮

とん
敦

こう
煌

新潮文庫

草 63 = 4



昭和四十年六月三十日 発行
昭和六十年二月十五日 四十二刷

著 者 井 上 靖

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵 便 番 号 一 六 二
東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
業 務 部 (〇三)二六六―五一一
電 話 編 集 部 (〇三)二六六―五四四〇
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Yasushi Inoue 1965 Printed in Japan

ISBN4-10-106304-4 C0193

新潮文庫

敦 煌

井上靖著



新潮社版

1700

敦

煌

趙行徳が進士の試験を受けるために、郷里湖南の田舎から都開封へ上って来たのは、仁宗の天聖四年（西紀一〇二六年）の春のことであった。

時代は世を挙げて官吏万能の時代であった。武人の跋扈を防ぐために文官を重用する政府の方針は、太祖から始まって太宗を経て仁宗に到るまで聊かも変わっていなかった。軍部の要所要所へも文官出身の官吏が配されていた。学問を身につけて官吏になることが、身を立てる者の等しく選ぶ道であり、官吏任用試験に合格することが、出世への緒口であったわけである。

仁宗の前の天子真宗は、自ら「勸学詩」を作つて、学問によつて登第出身するのが富貴を得る捷徑であることを天下に知らしめた。——家を富ますには良田を買うを用いず、書中自ら千鍾の粟あり。居を安んずるには高堂を架すを用いず、書中自ら黄金の屋あり。門を出づるに人随うなきを恨むなかれ、書中馬有り、多きこと篋かぶたの如し。妻を娶るに良媒なきを恨むなかれ、書中女あり、顔玉の如し。男児平生の志を遂げんと欲せば、六経勤めて窓前に向かつて読め。

進士試験に優秀な成績でさえ合格すれば、宰相を初めいかなる高官を望むとも不可能なことではなかった。好成績でなくても諸州の通判の如きもこの試験の合格者の中から拔擢されることが多かつた。真宗の詩の語るように、黄金も美人もすべて書を読むことに依つて得ることができ

た。

趙行徳が都へ上ったこの年の試験に、各地から京師に集まって来た者は実に三万三千八百人の多きに達した。この中から五百人が選ばれることになっていた。趙行徳は春から初夏へかけて都に滞在し、西華門付近の同郷出身の知人の家に寄寓していた。都の三市六街は受験者たちで溢れていた。老いも若きもあつた。この間に趙行徳は礼部に於ける帖經、雜文、時務策五道、詩賦等の試験をいづれも優秀な成績で通過していた。

漸く暑くなろうとしている初夏の陽射しが楡の葉越しに都大路に射し込んで来る或日、彼は吏部に於ける、身、言、書、判の試験を受けよという通達を受けた。身は体貌豊偉、言は言詞弁正、書は楷法遒美、判は判文の文理優長なるを能しとした。これに合格すれば、あとは殿中に於いて天子の策問に應ずることが残されているだけであつた。そして殿中の試験に於いて一位の成績を得たものは状元、二位は榜眼、三位は探花と称せられ、そうした優秀な成績の者は勿論のこと、総ての合格者がその輝かしい将来をここに約束されるわけであつた。

趙行徳は受験者の中に自分より優れた学力を身につけたものが何人もあろうとは思わなかつた。実際にまた彼はそう自負していいものを身につけていた。儒者の家に生まれ、幼時から学問に親しみ、三十二歳のこの年まで、書物を身辺から離した日はないと言つてよかつた。これまでの何回かの試験は、いづれも行徳にとっては容易なものであつた。その度に何百何千の競争者が篩にかかけられ、次々に脱落して行つたが、行徳としてはかりそめにも自分が試験を受けて、落伍者の群れにはいるなどということは想像もできないことであつた。

何亮の視察した当時は、辺境事情の最も差し迫った時期であった。そしてその後この西夏問題は依然として解決されないまま今日に到っていた。

西夏というのはチベット系のタングート族のたてている小国で、この種族は早くから五涼地方の東方に蟠踞していた。五涼地方は所謂夷夏雜居の地で、タングート族以外に、回鶻、吐蕃を初めとする雑多な少数民族が群がっていて、その幾つかは小さい王国をたてていたが、太祖の頃より独り西夏が強大となり、他種族を圧迫するばかりでなく、屢々中国の西辺に侵寇するようになっていた。西夏は表面は常に宋に臣属する態度を見せていて、他方中国の年来の敵である契丹からも封冊を受けており、その叛服常ならぬ態度は宋朝歴代の悩みの種であった。五涼に接する靈武の地は殆ど毎年のように西夏の騎馬隊による蹂躪を受け、ために何亮の安辺策が奏上される前年には、朝廷では靈武放棄の説さえ行なわれたほどであった。

何亮は、その安辺策に於いて、これまでの西夏対策のすべてを三つに分け、それらをきびしく批判検討した上、容赦なく欠点を挙げて、いずれもこれを不可として退けていた。

何亮が批判した三つというのは靈武放棄、興師征討、姑息羈縻の三説である。靈武を放棄せんか西夏の地は広くなり、西夏と西域諸民族の連合の恐れを生じ、しかも五涼東方に産する馬を得られなくなる。興師征討は辺兵の不足、糧食の欠乏で実現はむずかしい。少数部隊を出動させれば糧道を絶たれ、大軍を動かせば住民の困難思うべきものがある。それから姑息羈縻の策を執れば暫時の平和は望めるかも知れないが、豺狼の如き西夏は五涼に散らばっている幾つかの少数民族を併呑、中国将来の大患となるであろうし、現に宋のそうした出方を待っている西夏の思う壺

にはまるといふものである。

そして最後に何亮は最も実情に即したものとて己が意見を具申していた。西夏の西辺劫略の際の前進基地となる水草地帯に一城を築き、西夏の 大軍の 動くのを待ってこれを撃つことである。従来西夏との闘いに於いて勝利を収め得ないのは、いつも敵の主力との決戦ができず、果てしない沙漠の追撃戦に於いて、徒らに兵力を消耗するからである。若し敵の方から闘いを挑んで来るようなことがあれば、これを殲滅するのはさして難事ではない。西夏が軍を動かすことがない場合は、更に一城を築いて城を二つとなし、一つを城とし、一つを塞とする。一城の保存には巨額の費用を要するが、二城の場合は、その付近一帯に貧民を屯田せしめることができる。そして良將を選んで防備に当たらせ、徐々に恩信を以て夷族を招撫すべきである。

「——時の為政者が何亮の意見を用いず、何亮の否定した姑息羈縻の策をとって、辺境問題を今日に及びかせていることは、甚だ愚かなことである。今日西辺に眼をやってみると、遺憾ながらすべて何亮の予言した通りになっている」

趙行徳は何亮の安辺策を支持しながら、いつか自分の声が昂奮に震えているのを感じた。行徳は自分の周囲で、椅子が倒れ、机が叩かれ、怒声と罵声が沸き起こるのを知った。併し、行徳は言いかけたことは最後まで言ってしまったわねばならなかった。そこで再び彼は口を開いた。

「現在西夏は四囲の戎夷を征服し、日々強大となり、まさに中国将来の大患とならうとしている。宋はために、八十万の大軍を常に準備しなければならず、それを賄う費用は巨額に上り、しかも軍馬の産地は敵の手中にあって、その補給さえ満足にできない状態である」

趙行徳は天子の居室の幕が荒々しく引き揚げられるのを見た。そして次の瞬間、多勢の男たちが自分に向かつて突進して来るのを見た。行徳は立ち上がろうとしたが、どういふものか足の自由は失われていた。行徳は前にのめった。

その時趙行徳は夢から覚めた。彼は地面に前のめりになっている自分を発見、急いで軀を起こして辺りを見廻した。行徳の眼に映ったものは、強烈な陽が照りつけている誰もいない中庭であり、その一隅で自分を見おろしている官服の一人の吏員の姿であった。行徳は沙のついた掌を払って立ち上がった。先刻まであれほど多勢の受験者たちの居た中庭には、今は誰の姿も見えなかった。

「試験は——」

行徳は咳くように声に出して言った。官服の人物は行徳を蔑むように睨みつけたまま一言の返事もしなかった。行徳は不覚にも自分が睡りこけて、殿中に於ける天子の策問に応じている夢を見ている間に、大事な試験を自ら放棄した結果になったことを知った。恐らく自分の名前も呼び上げられたのであろうが、すっかり睡り込んでしまっていて知らなかったのである。

趙行徳は出口の方へ歩いて行った。尚書省の建物を出て、人通りの少ない静かな官衙街を抜けた。街衢から街衢へ、行徳は魂のない人間のように歩き続けた。殿中に於ける試験も、それに合格して高官の居並ぶ宴席に列することも、白衣公卿、一品白衫と称せられる栄光も、いまやすべては一片の夢と化してしまっていた。

趙行徳の心にふいに孟郊の七絶が浮かんで来た。春風意を得て馬蹄疾く、一日見尽くす長安の

花。これは孟郊が年齢五十にして進士試験の合格の報に接した時の感懐をうたったものであった。いまの趙行徳の周囲には長安の牡丹の花はなく、烈しい夏の陽が絶望に打ちひしがれた彼の身を包んでいるばかりである。厄介なことには進士試験は三年先でなければ行なわれないのであった。行徳はただ歩きに歩いた。歩くということだけが彼を支えていた。そしていつか彼は城外の市場に足を踏み入れていた。夕闇が訪れようとしている狭い路地の中を、汚ない服装をした男女が群がり動いている。道の両側は大部分が食物を売る店であった。鶏やあひるの肉を鍋で煮たり焼いたりしている店が立ち並んでいる。油のこげつく匂いと汗と埃とが入り混じって、むせ返るような異臭があたりに立てこめている。羊や豚の炙肉を軒先に吊り下げている店もある。行徳はさすがに空腹を覚えた。朝から何も食べていなかった。

幾つ目かの路地を曲がった時、行徳は行手に人々が黒山のようにたかっているのを見た。細い路地はそれでなくてさえ混雑を極めていたが、そこは全く通行止の状態になっていた。行徳は人垣の背後からその囲みの中を覗いてみた。

行徳の眼に最初映ったものは、木箱の上に置かれた分厚い板の上に横たわっている一人の女のむき出しにされた下半身であった。行徳はなおも躰を人垣の中へ割り込ませた。人々の肩越しにこんどは女の上半身が覗かれた。女は糸纏わぬ全裸の姿で横たわっているのであった。一見して漢人でないことは明らかであった。肌はそれほど白くはない。豊満な感じで、行徳がいままで眼にしたことのない艶を持って居り、仰向けにされた顔は顴骨が出て、顎は細く、眼は幾分落ち窪んで暗かった。

行徳はまた牀を前に割り込ませた。女の横たわっているすぐ横に、一人の半裸体の男が大きな刃物を手にして、見物人の方を睨みつけるようにして立っている。男は見るからに猙獰な面構えをしていた。

「さ、どの部分でもいい、買ったたり、買ったたり」

男は見物人をねめ廻しながら言った。その時だけ見物人は少しざわついたが、彼等の眼は珍しい売物から少しも動かされなかった。

「どうしたんだ、みんな。意気地のない奴らばかりだ。これを買おうというのはいないのか」

男は再び唖鳴ったが、周囲からは一言も発せられなかった。この時行徳は人垣の中から進み出て言った。

「いったいこの女はどうしたんだ」

そう訊かすにはいられなかった。すると刃物を持った男はじろりと行徳の方へ眼を据えて、

「こいつは西夏の女だ。男を寝とった上、相手の内儀さんを殺めようとした性悪女だ。肉を切り売りしてやる。欲しければどこでも買え。耳でも、鼻でも、乳でも、股でも、どこでも売ってやる。値段は豚の肉と同じだ」

と言った。そう言う男もまた漢人ではなかった。男の眼玉は青味を帯んでおり、胸毛が金色に光っている。肉付きのいい褐色の肩には何の符呪か判らぬ異形の彫物が施されてある。

「女は承知なのか」

行徳が訊くと、男が返事をする前に、思いがけず、そこに横たわっていた女が口を動かした。

「承知だ」

口調は荒っぽかったが、それは高い透る声だった。女が口をきいたので、見物人の間には一瞬ざわめきが起こった。行徳には女が諦めているのか、不貞腐っているのか見当がつかなかった。

「情けない奴らばかりだ。一体何時間こうしているんだ。買えねえのなら買えるようにしてやるぞ。指はどうだ、指は」

瞬間男が刃物を閃めかせたと思うと、刃物が板を打つ音が響いて、それと同時に女の唇から悲鳴とも呻き声ともつかぬ叫びが洩れた。行徳は、女が自分の頭部へと廻っていた腕の一本が切られたのではないかと思つた。行徳の眼に鮮血の迸つたのが見えたからである。併し、腕が切られたのではなかった。女の左手の指が二本、その先端の一部を失くしていた。

見物人はどよめいてその輪を拡げた。

「よし、買う」

趙行徳は思わず叫んだ。

「全部買う」

「買うか」

男は念を押した。するとその時、血を滴らせた手を板について女がむっくりと半身を起こして来た。そして彼女は行徳の方に血走つた顔を向けると、

「おあいにくだが、みんなは売らないよ。西夏の女を見損つて貰つては困る。買うならばらにして買って行け」

それだけ言って、女はまた仰向けにひっくり返った。行徳は女の言葉が何を意味しているかを知るのに多少の時間を要した。行徳は自分の態度が女から誤解されていることを知ると、

「いや、買うには買うが、お前をどうしようという気も持っていない。この男から買い取ってやるから、お前はどこへなりと行くがよい」

そう女に言って、それから男に女を買いとる交渉をした。たいした金額ではなかった。話はすぐ纏まった。行徳は男の言うだけの金を懐中から出して、それを板の上に置くと、

「この女を自由にしてやれ」

と、言った。男は金を掴むと、女に向かって、何か訳の判らぬ言葉で盛んに喚き立て、嗷鳴りちらした。女はのろのろと牀を板の上に起こした。

趙行徳は意外の事の成行きに呆然と突っ立っている見物人の輪を抜け出すと、そこから離れ、路地の出口の方へ向かった。半丁程歩いた時、行徳は背後から呼びとめられて振り返った。女が走って来た。粗末な胡服を身に纏ったその女は、ぼろ布で左の手首を包んでいた。女は近寄って来ると、

「お金をただ恵んで貰うのはいやだから、これでも持って行っておくれ。私はこれ以外何も持っていないんだ」

と言いながら、一枚の小さい布片を差し出した。出血のためか女の顔は蒼ざめていた。行徳が手渡された物を拵げてみると、それには異様な形の文字のようなのが十個ずつ三行に認められてあった。

「これは何だ」

行徳は訊いた。

「私にも読めないけど、私の名前と生まれたところでも書いてあるんだらう。イルガイにはこれを持っていないとはいれないんだ。私にはもう用はないから、お前さんに上げる」

「イルガイって何だ」

「イルガイを知らないのか。イルガイはイルガイだ。——珠のお城という意味じゃないか。西夏の都だ」

女は奥深い眼窩の中で黒い瞳を光らせながら言った。

「先刻の男はどの者だ」

趙行徳は重ねて訊ねた。

「回鶻ウイグルだよ。あいつこそ悪党だ」

女はそれだけ言うと布片を行徳の掌に残したまま、さっさと人混みの中へはいつて行った。

趙行徳は再び歩き出した。歩きながら行徳は、自分というものが今までの自分とはどこか違ってしまったのを感じた。何がどのように変わったのか見当はつかなかったが、兎に角、自分が心の中に持っていた大切なものが、他の何ものかとすっかり置き代えられてしまったような気が持ちだった。趙行徳はつい先刻まで進士試験にこだわっていた自分がひどくつまらないものと思えた。ましてそのために絶望的になっていった自分が滑稽な気がした。たった今彼が眼にした事件は、学問とも書物ともまるで違った無関係なものであった。少なくともいま彼が持っている知識